

ダンボール戦機WW

マザー母ッカー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダンボール戦機Wのキャラ達が神威大門に入学する話。

無印、W、ウオーズ全てを知っている方でないとは理解が出来ないかも知れません。

目次

第一話	上陸	1
第二話	レクリエーション	6
第三話	接戦	11

## 第一話 上陸

2053年、セカンドワールド。

鬱蒼とした森林エリア、デスフォレスト。

セカンドワールドでも最大規模の仮想国家、ロシウス軍が有すその土地は今、一体の“兵器”によって火の海に包まれていた。

『クソーバンデッドの奴ら、こんなもんなまで持ってんのかよ！』

ロシウス第13小隊長、ガーデイがコックピットの中で吠える。

彼の視線の先ではLBXよりも遙か巨大な兵器、キラードロイド・ドラガンゼイドが暴れる姿と、それに特攻してゆく仲間の姿があった。

ロシウスの汎用機体、ガウンタの機体が二本の巨大な刃に引き裂かれ、胸部のレーザーコアから放たれるレーザーに焼き払われていく。

まさしく地獄の様相、ここが戦場なのだと思慮なく理解させられる光景。

そしてガーデイに死にゆく勇氣はなく、ただ呆然と仲間が殺されるのを眺めていた。

『どうするガーデイ！このままじゃ俺らもお陀仏だ！』

『逃げようぜ！勝ち目ねえよ！』

『ダメだ……！アレを放っておいたらロシウスは終わりだ！ここでなんとかしなきゃなんねえ！』

とは言うものの、ガーデイにはドラガンゼイドを破壊できる未来が見えない。

しかし逃げる事も出来ず、まさしく絶体絶命。

ロシウス軍に配属された事を呪い出した、その瞬間。

『必殺ファンクション！』

そんな声が、どこからか響いた。

そして数瞬を置いてガウンタのセンサーが遠くから放たれた高エネルギー反応を捉え、

『なっ！』

地震と見紛うほどの揺れとともに地割れがドラガンゼイドの四本

の足を巻き込み、バランスを大きく崩させた。

今のは間違いなくアタックフアンクション、インパクトカイザーのものだ。

けれど、通常の機体を使うものとは威力が比べ物にならない。

あんなのを放てるのはロシウス……いや、セカンドワールド内でもただ一人だけだ。

『いたのか……！海道ジン！』

頼もしすぎる援軍の登場に、ロシウス軍が湧いた。

けれど、過去何度もキラードロイドと戦った経験のあるジンはわかってる。

あの程度で、ドラガンゼイドが機能を停止するはずがないと。

しかし、アタックフアンクションはクールタイムに入りしばらく使えない。

『今だ！バン君！』

『ああ！必殺フアンクション！』

故に、止めは親友に任せる事にした。

《Attack Function！JETストライカー！》

バンと呼ばれた少年のコックピット内に、アタックフアンクションの発動を知らせる人工音声が響き渡る。

それと同時にロシウス軍が見たのは、空から飛来する青いLBXだった。

その機体、オーデイーンは凄まじい勢いで急降下し、ドラガンゼイドが迎撃しようとレーザーを放射するも捉える事は出来ない。

そして飛行形態のオーデイーンの先端が剥き出しのセンターコア弱に突き刺さり、そのまま貫通する。

溢れたエネルギーは漏洩し、ドラガンゼイドの全身を電流が走り、爆音と衝撃波がデスフォレストの木々を襲った。

その光景をバンは、飛行形態から通常形態に戻ったオーデイーンの視点から眺めている。

「ふうー……やったな、ジン」

「ああ、バン君のおかげだ」

目的を達したというのに彼の表情に達成感はなく、ドラガンゼイドに無惨に破壊されたLBXの数々を見て、ひたすらに悔しがった。また、LBXを戦争の道具にしてしまった事が悲しくて、悔しくて。(……でも、だからこそ、俺たちで止めるんだ。LBXを戦争に利用するなんて、絶対に許せない)

バンデッドも、仮想国家も、バンには関係ない。

第二の世界を謳うこのセカンドワールドを破壊する。

あたかも、悪に塗れた世界を壊そうとしたレックスのように。そんな茨の道を歩み始めたのは、わずか二ヶ月前の事だった。



「——ん！——さん！——バンさん！」

耳元で響く、ハキハキとした少年の声。

ああ、もうそんな時間かと、バンはゆっくりと瞼を開いた。

「あつ、おはようございます、バンさん」

「ああ、おはよう、ヒロ」

上半身を起こすと正面には見慣れた、しかし随分と久し振りな顔がある。

およそ2年前、一緒に世界中を旅した大空ヒロが、あの時と変わらない快活さでバンの前に立っていた。

「とうとう着きましたよ！——早く行きましょう！」

「えっ、もうっ？」

そう言われれば確かに、地面が揺れる感覚は無くなっている。

どうやらバンは、本当に今の今まで眠ってしまっていたらしい。

横になつていたベッドから急いで降り、バッグと机の上に置いたオーデインを手に、ヒロと共に部屋から出る。

鼻腔を刺激する塩水の香り、肌に絡み付くような潮風、燦々と降り注ぐ陽光。

港特有のそれらの感覚を味わいながら、バンとヒロは船から降りた。

「バン、おせーぞ？」

「ごめんごめん、昨日、寝るの遅くなっちゃってさ」

そこで待っていたのは、懐かしい面子の数々。

カズ、アミ、ジン、ユウヤ、ラン、アスカの6人。

これまでも何度か集まった事はあったが、ほぼフルメンバーが集合するのはミゼル事変の時以来である。

「珍しいね、バンが寝坊するなんて」

「仕方ないよ、2年ぶりにみんなに会えるんだから」

「オレも久々にタケルに会えるからなく。元気にしてっかなく」

各々が表情を綻ばせ、楽しげに会話をしている。

思えば、一年前はずっと張り詰めた状況だった。

自由な時間はあったものの、やはりどこかで焦りもあって……それに比べて今は縛るものは何も無い。

だからみんな、年相応な笑顔を見せるのだ。

それにしても、ジンの表情が若干固いのが気になるが。

「話だと私たち専用の案内人がいるらしいけど……見当たらないわね」

「考えられるのは予定が変更したか、案内人が忘れているかのどちらかだろう」

「えーっ!?　じゃ、待ちぼうけってことか?　めんどくせー」

「まあまあ、取り敢えず連絡しておくよ」

「その必要はないわ」

バンがカバンからCCMを取り出すと同時、斜め上の方から若い女性の声が響いた。

その場の全員がそちらを、船の甲板の方を向くと、そこにいたのは見慣れた人物。

バーリーウツドの制服に身を包み、チャームポイントであるウェスタン風の帽子を被ったジェシカ・カイオスであった。

「ジェシカ!　どうしてここに?」

「どうしてって、私が案内人だからよ」

「でも、何も言っていなかったじゃないですか。みんなが来るのを楽しみにしてるわって、それだけですよっ!」

「そりゃあ、先に言ったら面白くないでしょう?　ちよつとしたサブ

ライズよ」

応答しながらバン達の元へ歩いていくジェシカ。

そんな彼女に更なる疑問を投げたのは、ジンだった。

「……まさか、往復したのか？」

「ええ、御明察よ」

「……どういうこと？」

「つまり、ジェシカは僕らと一緒に海を渡ってたんだよ。誰にも気付かれずにね」

「はー、手の込んだ事するなー」

と、そのタイミングでジェシカのCCMに着信が入る。

彼女がそれを確認すると、

「どうした？」

「早く来いってお達しね。相当レジェンド達を招きたいらしいわ」

A国副大統領、ガードインが起こした事件、通称『パラダイス事件』の解決に尽力した9人の少年少女を、世間は敬意を込めてレジェンドと呼んでいる。

L B Xに携わる者なら一度は聞いた事があるレジェンドの面々は、神威大門の上層部でも一目置かれていた。

「じゃあ、改めて言うわ。みんな、神威大門へようこそ！」

データクター事件、パラダイス事件、そしてミゼル事変。

集結し、別れた者達がここで再び集まった。

(胸騒ぎがする……何か、嫌な感じの……)

山の上に聳える校舎を見て、バンはふとそう感じる。

上手く言語化出来ないそれを払おうとして、けれど拭いきれないまま、皆と歩き出した。



## 第二話 レクリエーション

「そういえば、みんなは神威大門についてどこまで知ってる?」

神威大門の教育方針により1950年代の街並みを再現している神威島。

レジェンド一向がそんな古びた商店街を抜けて行っていると、ジェシカが誰にでもなくそう問いかけた。

真っ先にそれに答えたのはアミ。

「創立2051年で、LBXのプロプレイヤーを育成するための教育機関、よね」

「はいはいはい！ オレも知ってるぜ！ セカンドワールドがある！」

「ふふ、二人とも正解よ」

セカンドワールド。

神威島の地下に存在する巨大ジオラマの名称で、外壁や建築物に惜しみなく強化ダンボール技術を使用している、いわば第二の世界。

ちなみに、直径は10キロである。

果たしてどれだけの制作費と維持費がつき込まれているのか、アミには想像もできない。

「バンさん」

「ん、どうした？ ヒロ」

「入学式終わったらここに来ませんか？ 僕いくつか欲しいのあったんですけど、なんでか買えなくて」

バンが「うん、良いよ」と言葉を返す前に反応したのは、案内人のジェシカ。

「ああ、それはこの島の通貨がシルバークレジットだからね。シルバークレジットじゃないとものを買えないのよ」

「え……じゃあ僕は今無一文って事ですか!?!」

「心配しなくても、貴方達ならすぐ貯められるわ」

「バイトって事ですか……」

そんな会話をしている内に、神威大門の校門前まで着いた。

が、彼らがいるのは所謂裏口と呼べる場所だ。

他の生徒たちと同じ表口から入れば混乱が生じるだろうという神威大門の配慮である。

「みんな、入学式はどうしたい？ 出るのも出ないのも自由だけど」

「私はパス。面倒臭いもん」

「あ、じゃあ僕もパスでお願いします」

「僕は出よう。ユウヤとバン君はどうする？」

「出るよ。入学式なんて初めてだからさ」

「俺は……」

と、どうしようかバンが顎に手を当てて考えようとすると、自らに注がれる視線に気付く。

その主はヒロとランで、彼らが言いたい事は言外に伝わってきた。

すなわち、一緒に来てくれと。

思わず、苦笑に近い笑みが溢れる。

「悪いけどパスにするよ」

「わかった」

横目でチラリと確認すると、ヒロとランは目を輝かせ、喜んでいた。

「んー、バンが行かぬーなら俺もそうするぜ。アミはどうするよ？」

「私が出るわ。校長がどんな人か見ておきたいの」

「オレも出よーかな。そっちのが早くタケル達に会えそうだし」

「決まりね。じゃ、出る組は私についてきて。出ない組は日暮先生が

学校の案内をしてくれるわ」

(日暮先生?)とバン達が疑問に思いながら校舎の中に入ると、一人の人物が壁に体重を預けてカルテのようなものを覗いていた。

小さく外に跳ねた茶髪に眠たげな瞳と中々濃い隈、白衣のようなものを着ているため性別の判別が付きにくいのが、健康的に膨らんだ胸で女性だと一同は理解する。

女性はバン達に気付くとカルテをしまい、先頭に立つジェシカの前まで歩み寄った。

「……やあ、レジエンド達。申し訳ないが、私が君達の案内役選ばれた日暮真尋だ」

「では先生、案内をお願いします」

「ああ、仕事はこなす。が、もし君達が何か私に不満を抱いたとしたら、それは私を選出した学校側の責任だ。文句はそっちに言ってくれ」

「は、はあ」

と、中々に変わっている真尋にバンはそう返事を返すしかない。

そしてジェシカを先頭にジン、ユウヤ、アミ、アスカが入学式会場に向かい、その場に残されたバン達は真尋の言葉を待つ。

「あー……じゃあ早速だが、セカンドワールドに行こうか」

◆◆◆

「うおおおおお……！」

「うわー、すつごお……」

目の前に広がる地平線を眺め、そう言葉を漏らすのはヒロとラン。いくつもの扉と長い通路を経た先に存在する巨大ジオラマ、セカンドワールド。

そこは確かに、第二の世界を謳うだけのリアリティを持っていた。

地面の隆起やポツポツと点在する都市が事細かに再現され、どういう原理か違和感なく発生する海流、そして極め付けに網膜を焼かんに輝く太陽。

流星に、人はいないようだが。

フロントライン境界線がわからないほど、この世界は確かな“世界”を構築していた。

「これは……すごいね……」

「ああ、どーやったらこんな作れんだよ……？」

予想以上のクオリティに、さしものバンとカズヤも言葉が出ない。

が、日暮は見慣れているため足速に飛空装置の元へ向かう。

「早く乗るんだ。もうすぐ始まるぞ」

「それはどういう——」

バンが問うより早く、凄まじい警報音と無機質なアナウンスがセカンドワールドに轟いた。

『ウォータイム開始まであと20秒。全プレイヤーは戦闘の開始に備

えてください。繰り返します。全プレイヤーは戦闘の開始に備えてください』

戦争が、始まる。

◆◆◆

「さて、と」

深い緑の制服が特徴のロンドニア生徒が、勢い良くコックピットに乗り込んだ。

ドンと衝撃が走ると同時、コックピットの蓋が閉まっていき開戦の準備が整っていく。

そして目の前のレールに彼の保有するLBX、ハカイオー雷牙をセットしてその時を待っていると、カメラに複数人の顔が映った。

『よし、バン達も見てるらしいから頑張ろーぜ、リーダー！』

「ハッ、元々負ける気なんてねえ。真正面からぶつかれる機会なんてそうそうねえからな」

『だからって特攻は勘弁でござす。ボスがブレイクオーバーすると一気にキツくなるでござすよ』

「わかってらあ。ギンジ、指示諸々頼むぜ」

『フヒヒ、任せな郷田くん。ちやーんと導いてやるよ』

「よし、行くぞお！」

郷田ハンゾウの号令を皮切りに、鹿野ギンジが操るクラフトキャリアが発進する。

郷田ハンゾウ、矢沢リコ、亀山テツオ、そしてオペレーター兼メカニックの鹿野ギンジで構成されたロンドニア第7小隊、通称郷田隊。

彼らが降り立ったのは、ロシウス連合が所有するアフリカ大陸を模した土地だった。

低い草木とどこまでも開けた大地は魅せる戦いを行うには理想的であり、大門ジョセフィーヌもそれを考えてその場所をチョイスしている。

『へえ、アラビスタの白牙隊、ハーネスの乾隊、グレンシユティムの高崎隊がいる。錚々たる顔ぶれだねエ』

「んなのはどうでもいい。いるよな」

『へへ、もちろん。クルセイドの仙道隊もいるぜ』

今から行われるのは、新入生に向けた一種のレクリエーション。故にいくつかのルールと明確な勝利条件が設定されている。

勝利条件はエアーズロックを模した一枚岩の上に設置されたエリアを確保すること。

ルール1、今回のゲームは各国に1小队のみ参加させられ、各国はこれを拒否する権利がある。

ルール2、このゲーム下でのブレイクオーバー、ロストは退学処分とならず、修繕費は全額負担される。

ルール3、罨やスモーク等のアイテムの使用を禁ずる。

ルール4、射線を遮る障害物がない関係上、両手銃、バズーカ、ミサイルといった長距離武器の使用を禁ずる。

郷田は薄々感じていた……というより、信じていた。

普通のウォータイトムでは出来ない、久々の真正面からのバトル。

そんな貴重な機会を、仙道ダイキが無視するはずがないと。

「さあやろうぜ、仙道お!!」

「ハッ、声は聞こえないが何を言ってるかわかるぜ。そんなに俺と戦いたいなら付き合っつてやるよ。一番最初に退場するのはお前だ、郷田」

再度のアナウンスが鳴り響き、各々の小队が動き出す。

バトルスタート。

### 第3話 接戦

「凄い、ですね」

「ねー、私もびっくり」

飛行装置に乗りながら眼下に広がるバトルを見て、ヒロはそんな言葉を漏らし、ランも適当に言葉を返す。

実のところ、ヒロは甘く見ていた。

世界大会アルテミスで優勝出来た自分なら、入学してもさほど苦労はしないだろうと。

だが、そんな予想は呆気なく覆される。覆され続けている。

「君たちが満足しているのなら何よりだ。ルールを考案した甲斐がある」

新入生たちを、そして何よりレジェンド達を飽きさせず、熱中させるようなレクリエーションを考えろと白羽の矢が立ったのは日暮である。

これで校長から呼び出される事はないだろうと彼女が思考すると同時に、残りの部隊が2つに減った事を知らせるアナウンスが響く。

「残ってるのは……あっ！ 郷田さんと仙道さんですよ！ バンさん！」

「ああ、実力者揃いだったのに凄いな、二人とも」

「へへっ、どっちが勝つか見ものだぜ」

勝者が所属する国に報酬が与えられるこのレクリエーションも、いよいよ大詰めに入る。



「よお、郷田。随分と消耗してるじゃねえか。苦戦したみたいだなア？」

「ハッ、こんなもん軽症だ。テメエこそ、あちこちバチバチ鳴ってるぜ」

相對する郷田のハカイオー雷牙と、仙道のイビル・ナイトメアはスピーカー越しに会話をしていた。

時間に制限がなく、スナイパーといった奇襲を受ける要素がないか

らこそ成立している。なお、示し合わせていたわけではない。

そして、ハカイオーとナイトメアは両者とも相応の負傷を負っていた。

ハカイオーは片目と右肘の関節を失い、ナイトメアもその薄いストライダーフレームのあちこちに浅くない負傷を負っている。

「勝ち俺が貰う」

瞬間、ナイトメアの姿が掻き消える。

テレポートではない、一切の事前動作なく高速移動を開始しただけだ。

郷田にその姿は捉えられないが、大まかな位置情報はギンジと情報収集機器が教えてくれる。

それで十分だ。

「リアッ!!」

一切の無駄なく突き出された獣神雷鳴刃がデスサイズを受け止め、僅かな硬直が発生する。

郷田がその隙にナイトメアを掴もうとするも、仙道は極めて冷静にそれを躲す。何回も何十回も、何百回もバトルを繰り返しているのだ。この程度なら読める。

「まだまだアー!」

そして、郷田もこの程度で終わるわけがないと知っている。

間髪入れずに片方しかない獣神雷鳴刃でナイトメアを攻め立て始めた。

柄で、刃で、その身軽さで、ナイトメアは決してダメージを受けない立ち回りでハカイオーの攻撃をいなし続ける。

(クソツ、片腕がないせいで攻めきれねえ! 必殺フアンクションの【ガオーキャノン】はクール中だしそもそも避けられる!)

数年前、郷田は高速移動するナイトメアを片腕を犠牲にして倒すという荒技で攻略した、しかし今は通じないだろう。

二刀流であればまだなんとかあったかもしれないが、そんなたらればを考える時間すら郷田には惜しい。

上段の突き出しが上にそらされ、そのまま獣神雷鳴刃を振り下ろす





をメカニックが解析し、状況判断に用いるといった使い方がされている。

最も有名な情報収集機器はアキレスの鶏冠で、それを真似る者はセカンドワールドでも少なくない。

そして仙道はメカニック以外の隊員を持たず、情報収集機器の恩恵に与れないためリコの奇襲を受けた、というわけだ。

だが、その程度のデメリットなど仙道は百も承知であり、ナイトメアの障害にはなり得ない。

「フツ、必殺ファンクション！」

《Attack Function! デスサイズハリケーン!》

ナイトメアが高速回転を始め、黒い竜巻が発生する。

ブロウラーフレームのハカイオーに直撃してもロストには出来ないだろうが、戦闘不能は免れない。

仙道は自身の勝利を確信し、

「——遅いぜ、仙道」

紅い軌跡を置き去りにして、ハカイオーがナイトメアの眼前に躍り出た。

仙道の思考がまたも空白化する。

ハカイオーがこれほどの高機動を持つなどあり得ないのだ、いくら改造したと言えど限度がある。

しかしそれをじっくり考える時間はない。

強引に回転を止めて完成途中の竜巻を霧散させ、デスサイズを下段から滑らせる。

対し獣神雷鳴刃は上段からの袈裟懸け。

死を前にして、一秒がどこまでも引き伸ばされていく二人の視線が映像越しに交差する。

直後、郷田の視界がブレた。

九十度、百八十度と視界が回転し、ナイトメアを見上げる形で止まった。

デスサイズが首を捉え、ハカイオーの刈り取ったのだ。

コアスケルトンからのエネルギー供給が途絶え、郷田のコックピツ

トがブレイクオーバーを示す淡い緑に覆われる。

理論上、LBXは必要なものを全て胸部のコアスケルトンに収めているため頭部なしでも動く事は可能だが……そもそもダメージ超過だ。

そして、ナイトメアも無事とは程遠い。

肩から入った獣神雷鳴刃が、コアスケルトンを僅かとはいえ傷付けていた。

左腕は当然動かず、剥き出しの部分からエネルギー漏れによるスパークが発生し続けている。遠からず、ブレイクオーバーは免れないだろう。

だが、まだ倒れるわけにはいかない。

まだ、決着はついていないのだ。

「リコ撤退だ！ 逃げろ！」

「おっ、おう！」

ギンジの声に引つ張られ、リコがホバー機構で後退を始める。

対し仙道はその場を動かさず、画面の端に映るオペレーター少年とナイトメアの状態を擦り合わせていく。

「おい、今の俺はどれくらい動ける」

「全力稼働は無理。重心も不安定だし脚部の回線もイカれた」

「チツ、郷田も面倒な事してくれたぜ。サポートしろ」

ブレイクオーバーを目の前にして、どこまでも冷静に勝ちを引き寄せる、それが仙道の戦い方だ。

故に、オペレーターにサポートを求める。

「嫌だよ」

「……あ？」

だが、オペレーターはそれを拒否した。

理由は単純明快、ナイトメアの修理に多大な費用がかかるからだ。LBXの修理やメンテナンスは基本的に部隊のメカニックが行う、つまりパーツはメカニックが自費で手に入れる必要がある。

ナイトメアはその特性ゆえバランス補助機や装甲、さらにカメラの機能に至るまで高性能なパーツで構成されている。

つまり、ブレイクオーバーならまだしもロストなんてしたら、たとえ優勝できても収支はマイナスになってしまうのだ。

それに、

「勝利条件は他のLBXを殲滅する事じゃない、あの丘のエリアを確保する事だ。クイーンとの戦鬪でブレイクオーバーしてもおかしくないのに、勝利できなかったら僕が大損なんだ」

「……今も損してるだろうが」

「コンコルド効果だね。少し冷静になりなよ、仙道君。郷田には勝ったんだ、これ以上いくら頑張ってもクルセイドの利益が手に入るだけだよ」

「……吊るハングドされた男の逆位置。フン」

吊るされた男の逆位置、意味は徒労に終わる。

タロットカードに全幅の信頼を置いている仙道は、それで操縦桿から手を離す。

セカンドワールドに警報が鳴り響き、レクリエーションの終わりを告げた。